

## 西中千人さん インタビュー

薬学出身でありながら他分野で活躍されている方にインタビューするコラム「薬学がくれた私の道」。今回は、日本陶芸におけるヒビ割れに宿る日本の美意識を、あえてガラスで表現した作家、西中千人さんの登場です。

—まず幼少期時代のことを教えてください。

西中 和歌の浦という漁師町で育ちました。とにかく海以外何もなく、小さい時から泳いだり、釣りをしたりして育ちました。

—薬科大学に進まれたきっかけをお聞かせください。

西中 父が大きな病気を患っていて、自分でも役にたてるようなことをしたくて、薬学部を選びました。ただ、注射とか解剖とかとても嫌いで、予防注射もこれまで1回も接種したことがありません。昔、道路交通法違反でつかまると、運転免許試験場で交通事故の映画を見せられました。そんなのもだめでした…。ですので、医学部ではなく、人体の解剖実習がない、薬科大学に通うことにしました。

—大学生活のことを教えてください。

西中 ほんの少しだけ、基礎スキー部に入学していました。和歌山で生まれ育ったので雪を見たことがなく、雪を見たくて入学したのですが、練習はひたすら走るだけでした…。

—在学中に中国に留学されていますね。

西中 以前から中国の歴史的人物(老子、韓非子、孫子など)の思想が好きで、そのため中国の古い文化を学びたかったのですが、それまで留学のタイミングがありませんでした。ですが在学中、中国からきた鍼師に中国語を習っていたのですが、その先生に大学3年時に紹介してもらい、中国西安の西北大学に留学しました。歴史を振り返ってみると、日本は数千年の間、ずっと中国に憧れ続け、思想や文化を取り入れようとした国だと思います。平城京や平安京などは、唐の都「長安」を意識して作られてい



西中千人さんのプロフィール

1964年和歌山県生まれ。星薬科大学卒業後、カガミクリスタル勤務を経て渡米。カリフォルニア芸術大学で彫刻とガラスアートを学ぶ。1998年ニシナカユキト GLASS STUDIO 設立。国内外の画廊で個展を行うほか、ニューヨークやロンドンのアートフェアにも出品。受賞歴は、「CREATIVE HACK AWARD 2013」グラフィック賞など多数。

ますしね。それで、どうしても中国を訪ねてみたくなり、留学しました。

—その後、日本に戻って卒業なさったのですね。

西中 そうです。日本に帰って復学、卒業して、ちゃんと国家試験に受かって薬剤師免許も持っています。

—ガラスアートの道へ進まれたきっかけは何ですか？

西中 学校を卒業し、自分の進路に悩んでいた頃、浜辺をドライブしていて、偶然ガラス工房に立ち寄る機会があり、それを見学してとてもやりたくなってしまいました。それまでガラスといえば、建築ガラスや自動車ガラスのような無機質で、冷たい固体のイメージしかありませんでした。ところが、工房の坩堝(るつぼ)でドロドロに溶け、オレンジ色に輝くガラスを見ているうちに激しい感動を覚えました。ガラスという素材に心底まいてしまったのです。そして、自分の進むべき道はこれだと直感しました。

—それで、ガラス工場で働こうと思ったのですね。

西中 そうです。ガラス工場で働かせてもらおうと、高級ガラス食器メーカーであるカガミクリスタル(ロイヤルファミリー御用達の会社)の戸をたたきました。最初は、20歳をすぎた人は採用しないといわれて断られたのですが、ちょうど工場を移転する

ということで職人、特に重い花瓶を作る職人が退職してしまい、「力があるなら採用するよ」と言われて就職させてもらいました。見習いとして働き、数か月を経た頃、ある職人さんに「何十年前前にも、おまえさんに似たのがうちに来たよ。今は大学の先生をやっているはずだから、一度会ってみるといいんじゃないか」と言って多摩美術大学の伊藤先生を紹介してもらいました。早速その先生に会いに行ったら「芸術としてガラスの勉強をしたかったら、ちゃんと勉強したほうがいい」と言われて、(多摩美術大学ではなく)アメリカの大学を紹介してくれました。

—それで、アメリカの大学に留学なされたのですね。

西中 そうです。若い時って、偉い先生が言うのと信じてしまうでしょ？それでTOEFLも受けて、カリフォルニア芸術大学に入学し、ガラスアートと彫刻を勉強しました。また、技術や表現力を磨くだけでなく、社会におけるアートの役割など芸術に関する様々な理論を学びました。講師はいずれも第一線で活躍するアーティストであり、ここで学んだことは今でも大きな財産となっています。

—芸術大学は卒業なされたのですか？

西中 大学側との考え方の違いで、入学して3年弱で除籍になってしまったんですよ。中退ではなく、除籍になってしまいました。まさかと思いました。ただもう大学は卒業しているので、いいかなと思いました。学校の先生を目指しているならば卒業することが必要だったかもしれませんが、自分は作品を作るために芸術を学びにカリフォルニアに留学しただけだったので、仕方がないと思いました。ゴルフでも、ティーチングプロとトーナメントプロがいますよね。芸術を教えるということは全く考え

ておらず、自分が探求した作品を制作したいと思っていましたので、さっさと(作品の制作を)始めようと思いました。逆に卒業したというライセンスを持っているからといって、芸術の世界は全然関係ないですから。でも薬科大学を卒業したことは、作品を制作する上でとても役に立っています。

—帰国後はどうなされたのですか？

西中 アメリカ人の知り合いが、富山に良い学校があると教えてくれ、帰国後富山市立ガラス造形研究所で2年ほど助手を務めてから独立しました。平塚の小さい工房にいたのですが、田舎育ちなので狭いところが嫌いで、11年ほど前に千葉県茂原市に引っ越して、ここで作品を制作しています。

—定期的に海外旅行に行かれています。創造性を高めるために行かれていますか？

西中 海外は、年に1か月程絶対に行きます。田舎(茂原)にいる意味とは、余計なマスメディアや流行などとの接点を断つことです。本来自分が追求したい作品が余計な情報により影響を受けないように、それを排除するために田舎にいます。自分が徹底して(雑念がなく)やりたいことを追求できるように。ただ、それを行うと自分が世の中から離れていってしまいます。そのようなことのないように、世界的に見て自分の立ち位置を再確認したり、1回自分をリセットするために旅に出ます。芸術の世界にいる人間は自分の世界を追求します。しかし、例えば5年、10年経過して自分ではすごく(作品を)追求し、変わっているつもりでも、お客さんから「10年ぶりに展覧会にきたけれど、作品、何も変わっていないね。」と言われると、「あなたは終わっているね」と言われたように感じてしまいます。深く追求しているつもりでも、袋小路に入ってしまうと、自分が見えなくなることがあります。研究の世界と一緒に、芸術の世界も常に変わっていかねばいけません。そのため、一旦全部止めて、1か月間全く違う世界へ行き、様々なことを感じる中で、今行っていること、自分の世界観や追求している道について考えに行きます。国内でうろろろするのではなく、全く違う世界から見るのが大事なのです。先



(左)薬科大学時代(中央)

(右)アメリカの芸術大学で実習を受けている風景

程、中国やアメリカに留学したことをお話しましたが、その時、外から日本が見えたのです。昨年は、ヨーロッパからアジアを海路で巡ったのですが、ギリシャやアジア、インダスの文明を肌で感じとる中で、自分を見つめ直し、その中で今後何をすべきかを再確認することができました。

—薬科大学を卒業して、役に立っていることは？

西中 大きく分けて2つあります。1つはサイエンスの部分です。ガラスは、色によって溶かす金属、例えばセレンを使用して紅色を出すとか、コバルトを使用して青色を出すとか。色を着色するために様々な金属を用います。これらは、溶解したり収縮したりする温度も違います。溶解、収縮する温度をちゃんと理解して、その通りに温度コントロールを行い、金属物質を調合しないとガラスが割れてしまいます。現在行っているガラス片による呼継の技術(異なる色のガラスをあえて壊し、その片を溶かして継ぎあわせる手法)は、このような無機化学の知識を理解していないと、全部割れてしまいます。

—この呼継は誰でもできるわけではなくて、薬学の知識があって初めてできる技術なのですね。

西中 そうです。薬学で学んだ知識がとても必要です。このような無機化学の知識がないと、制作過程でパクパク割れてしまい、作品になりません。もう1つは、子どもの頃は薬を服用すれば病気が治ると思っていたのですが、薬学部では「どうして？その機序は？」ということをお勉強しました。生体内でどのようなことが起こって人間は病気になるのか、薬という科学成分は生体内でどのような作用を及ぼし、病気が治るのか、ということです。すなわち、「現象論だけでなく、その発現した過程や機序を考える」ということを学びました。それが、現在の作品につながっています。この話をいただいて、薬科大学在学中に授業を受けた今枝先生のことを思い出しました。あの先生の授業おもしろかったですよ？—テストに何を書けばいいかわからなくて、自分はとても苦手でした。

西中 自分の考えついた、新しい論説を書くと試験に合格しました。サイエンスもアートも、とてもク

リエイティブなものです。教育というのは情報の共有だと思います。ただ、今の時代、スマートフォン1台あれば知識を習得できますので、(知識を得るためには)大学に通わなくて済むと思います。でも、クリエイティブはそうはいきません。君たちはその情報をもとに何を考え、どんなことを創造できるの？知識と理論を頭の中でゴチャマゼにして、あなたは何を考えつくの？ということを今枝先生は私に問いかけてくれました。

—薬科大学で学んだ知識と日本の伝統文化が融合して今の「呼継」ができたのですね。

西中 日本には400年以上も前から、ヒビを美だという意識があります。金継って知っていますか？お茶碗が割れた際、破損部分を漆で接着し、接着部分に金などの金属粉で装飾して仕上げる日本古来の修復技法です。このように直すのは日本だけです。エジプト、ローマ、インダス文明4000年の間で、割れたものはたくさんあると思いますが、ヒビをきれいだと思ったのは日本人だけなんです。

アメリカの芸術大学に留学していた時、金髪の女の子に「源氏物語読んだことある？」って質問されました。26歳の若造が読んでいるわけじゃないですよ。でもその時、自分は「英語はそこそこ話せる、なんちゃってアメリカ人だけど日本人じゃないな」と思いました。アメリカの歴史は200年程度、それに比べて日本には2000年近く文化も歴史もあるのに、日本に生まれ育ちながら、日本古来の伝統や風習を何も分かっていないと感じました。海外へ留学していたから余計分かったんです。そこから、日本のことをもう少しちゃんと勉強しようと思いました。



アトリエには、呼継の作品が展示されている。



—なぜ日本人は器のヒビを美しいと思ったのでしょうか？

西中 個人的に考えてみました。歴史的背景でいくと、呼継(通常は、壊れた陶器片を継ぎあわせる)という技術が生まれたのは、今から400年以上前の室町後期～桃山時代前期と言われており、織田信長の弟、織田有楽斎がお茶碗を継いだ作品が一番古く残っています。この時代、お茶を立てていたのはみんな侍でした。この頃は戦国時代であり、殺し合いをしていた時代です。戦をし、死ななかつた者がお茶を立てることができたのです。すなわち、茶の湯とは、武士の peace of mind であったと思います。今、こうお茶を立ててられるが、次に戦へ行ったら殺されるかもしれない。これまではたくさんの人を殺してきたが、次は自分が殺されるかもしれないと分かっていたから、命がどれだけ尊いものなのか、今生きている輝きがどんなにすばらしいことなのか、ということを感じながらお茶を立てていたと思います。そんな時代だったからこそ、割れている器にもはかない美を、生きている輝きを見いだしたかったから、ヒビにわざわざ金を入れて修復したり、壊れた陶器片を継ぎあわせたりしたのだと思います。そのような、侍の生き様や魂を表現したのが金継や呼継であったと考えています。で、それを世間が「ダサイよ」と評価していたらこの伝統は残っていなかったと思いますが、皆がこの美しさに共感したからこそ、現在まで伝統が残ったのです。

—そのヒビを現代流に表現してみたのですね。

西中 そうです。今、私は侍でもなく、刀も差して



炉の中の温度は1,300℃にもなる。この炎によってガラスはいかようにも形を変えていく。

いないし人も殺しませんが、その mind の美しさを、現在の技術や社会情勢、科学的なことも含めて表現しようと思いました。それがこのガラス片による呼継だったのです。今枝先生が教えたかったのはこれだと思いました。アインシュタインの言葉で「常識とは、18歳までに身につけた偏見のコレクションのことを言う」というのがありますが、今枝先生はその常識を我々に打ち破ってもらいたかったのだと思います。現在ある常識や学説は、何年前に作られたものであって、何年後には変わっているかもしれません。それを打ち破るのは、これからの常識を作るのは今いるあなたですよ、ということをお伝えしたかったのだと思います。

—最後に薬学生に一言お願いします。

西中 行ききってください。現在ある情報や知識をもとに自分のやりたいこと、好きなことをやりきってください。その先に新たな地平線があります。

—1つのことをやり遂げた先生ではないと言えない言葉ですよ。本日は貴重なお話をどうもありがとうございました。

### インタビュー後記

インタビューー

伊勢雄也 Yuya ISE

日本医科大学付属病院、ファルマシア委員

とある土曜日の午後、茂原の事務所兼工房でお話を伺いました。ホームページでお写真を見る限り、怖い人かな? 思ったのですが、そんなことは全くなく、誠実でバイタリティーあふれる方でした。お話を伺いながら、自分も今後の人生について考えさせ

られたのと同時に、もっと頑張っていかなければならないと感じました。今後の作品が楽しみです。西中さんのますますのご活躍を心より祈念いたします。